

## リスクと不確実性



佐藤博樹  
Works Review 編集委員  
東京大学社会科学研究所 教授

リクルートワークス研究所は、2009年度の研究テーマとして「人と組織のリスク」を掲げて本論文集に収められた多様な研究を行ってきた。研究所のホームページのプロジェクト紹介には、「グローバル化、サービス経済化、知識社会化といったパラダイム転換」と「100年に一度といわれる今回の不況」の「2つの環境変化が、企業の人材マネジメント、個人のキャリア構築の視界に、さらに新たなリスクを引き起こす」として、今回の研究テーマを選択した問題意識が記されている。

ウルリヒ・ベックの『危険社会：新しい近代への道』（1986年）の刊行以降、リスクという概念が社会科学の分野で脚光を浴びることになった。ベックは、科学技術の発展が、富の生産と平行して、リスクを社会的に生産してしまうことを指摘し、こうした社会を「リスク社会」と定義した。そして、産業社会では富の分配が重要な問題となったが、リスク社会ではリスクの分配が社会問題となるとした。今回の研究テ

ーマも、ベックの研究関心の延長線上にあると言える。

最近では、社会科学の分野だけでなく、リスクが日常用語として使われることが多くなった。この背景には、多様なリスクに遭遇する不安など人々のリスクに対する関心の高まりがある。他方で、リスクが曖昧な意味のまま使われたり、リスクに対して過剰反応したりする事態も生じている。

ベックの前掲書の刊行以降、社会科学の分野でリスクが脚光を浴びるようになったと述べたが、それ以前にリスクが社会科学の研究対象になっていなかったわけではない。経済学の分野では、リスクや不確実性が重要な分析概念として使われているだけでなく、異なる概念として区別されている。しかし日常用語では、リスクと不確実性が厳密に区別されずに使われることが少なくない。通常、リスクは、確率的に出現を予想できる人や組織などにとって望ましくない事象であり、他方不確実性は、確率的

に出現を予想することができない事象である。例えば、企業経営が市場において顧客ニーズや技術構造の変化を予測できない「不確実性」に直面することで、人々の雇用の安定性が低下する「リスク」が高まったわけである。

ベックは、科学技術の発展がリスクを社会的に生産すると述べたが、同時に科学技術の発展は、我々人間が直面する様々なリスクを軽減してきたことも事実である。しかし最近では、この当たり前の事実が忘れられがちである。人間は、出産から死に至るまで、様々なリスクに遭遇するが、医学の発展が乳児死亡率を大きく低下させた。また、リスクの発生頻度を統計的に計算することで、リスクに遭遇した場合の事故を補償するセーフティネットの整備も行われてきた。

科学技術の発展は、新しいリスクを社会的に生産するだけでなく、同時にその軽減にも貢献してきたにもかかわらず、最近ではリスクの軽減よりも、リスクの増大を強く感じ、かつそれに関して不安を感じる人々が少なくないのである。この理由はどこにあるのであろうか。

第1は、近年、人々のリスクへの不安が高まっている背景には、リスクの高まりではなく、不確実性の増大があるのかもしれない。つまり、望ましくない事象の発生を予測できないことに起因する不安である。この中には、不確実性ではなく、リスクとしてその発生確率を計算できる事象であっても、そのことを正確に認識していないことによる不安も含まれていよう。例えば、企業が、有期契約社員の契約更新回数に上限を設定している背景には、合理的な更新手続きの下に契約更新を繰り返した場合の雇い止めを行えなくなるリスクを正しく計算できていないことなどもある。

第2は、情報収集と処理技術の高度化によって、人々がこれまでリスクとして認識することがなかった事象に関してまで、リスクが計算されるようになり、そのことが人々を不安に駆り

立てている可能性である。同時に、計測された多様なリスクが情報として提供される際に、それぞれのリスクの発生確率を考慮せずに、様々な事象を同程度の発生確率のリスクとして認識していることや、発生確率の低い事象であってもその事象の特性が不安を強めている場合もある。例えば、ベックは、チェルノブイリの原発事故の発生を受けて、危険社会のメカニズムを分析したが、原発事故に遭遇する確率は、交通事故の確率よりも低いにもかかわらず、原発事故に不安を持つ人々が多い。リスクの程度と不安の大きさが相関しないことが少なくないのである。これは実際のリスクと認識されたリスクの違いと言える。

第3は、新しいリスクが発生し、リスクを軽減するためのセーフティネットが機能しなくなっていることが、人々のリスクへの不安を高めていることや、リスク自体は新しいものでないものの、セーフティネットなどの社会制度への信頼性の低下が、不安を高めている可能性もある。不確実性に直面した企業が、新しい人材活用を構築し、そのことが働く人々の就業形態を変化させたが、既存のセーフティネットではカバーできないリスクを働く人々にもたらし、そのことが人々の雇用に関する不安を高めている可能性である。

今回の研究成果が、働く人々や企業組織が直面しているリスクや不確実性の正しい認識の定着や、リスクに対処できるセーフティネットの構築などに関して大いに貢献出来ることを大いに期待している。